

取り憑き幽靈と社畜ちゃん  
みなぎし  
すい

## 【人物一覧表】

香椎 唯 (6) (12) (18) (3)

0) : O L

逢沢 百合花 (6) (12) (18)

(享年 18) : 幽靈

時乃 神子 (6) (12) (18) (

30) : パパ活女子

佐々木 麗華 (6) (18) (30)

: 刑事

佐藤タケシ (40) : 刑事

中島タクヤ (40) : ヤクザ構成員

丸井太郎 (55) : 丸井組組長

名木野恭平 (8) (50) : 教師

名木野圭 (6) (48) : 会社員

浅野陽太郎 (48) : 会社員

生徒 : 高校生

ヤクザ : 丸井組

○ 路地裏

路地裏付近に、パトカーが何台か停まっている。パトカーのサイレンが鳴つている。

路地裏に倒れている女子大生。はだけた服で死んでいる。

佐々木麗華（30）「まだだ！ 12年前の

百合花と同じ……」

麗華、拳を握る。

麗華「下衆野郎め！」

麗華、怒りの表情になる。

○（回想）公園

香椎唯（6）、麗華（6）、逢沢百合花（6）、時乃神子（6）、ボールで

遊んでいる。

唯「えへへ！ 楽しいね！」

百合花「うん！」

麗華「うん」

神子「た、たのしいね」

4人、笑顔を向けあう。

唯「えへへ。一生友達だもんねーっ！」

唯N「そう。私たちは、永遠の友達。途切れ  
ない絆で結ばれてる、大親友だ」

唯、満面の笑みでにこにこしている。

（回想終わり）

○会社・オフィス

唯N「これは、私が親友の未練を探す物語」

唯（30）、目にクマがある氣だるげ  
な表情で、パソコンのキーボードを叩  
いて仕事している。百合花（享年18）  
、ふよふよ浮きながら唯にくつついで  
いる。

唯N「私には、つきまとつてくる幽霊がいる。

名前は逢沢百合花

サラリーマンA「あ、あの。ここはどのよう  
にすればいいのでしょうか！」

若いサラリーマン、唯に資料を見せる。

唯、椅子を回転させてサラリーマンA

のほうを向く。

唯 「ああ、ここはね」

T 「香椎唯 逢沢百合花」

唯、資料を指しながら説明する。

それを見た他のサラリーマンたちがぞくぞくと唯のもとにやつてくる。

それら質問を次々とさばく唯。

課長 「香椎、すごいな」

唯 「あ、どうも……」

課長 「そんな香椎に、このたび課長への昇進が決定した」

唯 「え……私ヒラ……」

唯、呆然とした表情になる。

唯 「はい、わかりました……」

氣だるげな返事をする唯と、唯をじつと見つめる百合花。

唯 M 「まあいいや。明日ひさびさにみんなと会うし……」

校門前に、声を張つて募金を呼びかけている女子生徒3人がいる。

唯 「はい、これ」

唯、1万円札を箱に入れ、校門をくぐる。

女子生徒A「いつもありがとうございます！」

女子生徒B「やばすぎ……定期的に来る」

女子生徒C「あの幽霊ついてる人でしょ？」

卒業生らしいよ。やば！ 男子に聞いたけど、いつも万札だつて！」

○高校・中庭

唯、花壇を手入れしている。

唯N「私は、困つてる人を見捨てることができない」

○（回想）小学校周り

唯と百合花、大人たちと一緒にゴミ拾

いをしている。

唯（12）「ねえ。なんで、百合花ってこん

なことしてゐるの？」

百合花（12）「これやると、この人たちが  
にこにこするんだよ！」

百合花、唯に向かってにこつと笑う。

唯「す、すごいね……！」

（回想終わり）

○高校・中庭

唯N「あのときの百合花の顔があまりにも優  
しかつた。そこから、人助けで心が温まる  
ことを知つた。私は、困つてゐる人を見捨て  
られなくなつた」

唯、雑草を抜く。

女教師「あら、香椎さん。いつもありがとうございます。  
ね。はい、これ。逢沢さんも、ありがとうございます。  
ね」

女教師、唯に飴玉を渡す。百合花の頭  
をなでるふりをする。

唯「どうも」

唯、かがみながら軽くお辞儀する。女

教師、立ち去る。

唯、袋を開けて飴玉を口に放り込む。

百合花「どうしたの？ そんな暗い顔してさう。そういう時はスマイルがいいんだよ！」

百合花、笑顔で唯の頬を触ろうとするが、指が頬を通り抜けてしまう。

百合花「（笑顔で） 今日またうちら4人で会うんでしょ！」

唯N「百合花は、自身が学校にいる時もしくは幼馴染4人組には見える不思議な幽霊。学校ではちょっとした有名人だ」

唯、じょうろを持つて花に水をやる

百合花、満面の笑みを唯に見せる。

百合花「ね。わたしの成仏なんて気にしないで絶対犯人探してね！」

唯「うん」

○高校・校門（夕方）

唯、校門をくぐろうとする。

男子生徒A「あ、香椎さんだ！ 幽霊の逢沢

さんもいるぜ！」

男子生徒B 「まじか！ 握手してもらおうぜ！」

生徒たちが、ぞくぞくと2人に駆け寄つてくる。唯、生徒たちと握手する。

百合花、握手の動作をしていく。

唯 「ふふっ」

唯、くすりと笑う。

○居酒屋・客席（夕方）

唯、麗華、神子（30）、同じ席に座つている。百合花、唯にくつついている。

T 「佐々木麗華 時乃神子」

唯 「みんな、きてくれてありがと……乾杯」

麗華 「乾杯」

麗華、クールな表情で酒グラスを持つ。

神子 「乾杯、だね……また、この4人で集まれて、うれしい」

神子、地雷系コスを着ている。全体的

にスローペースな話し方。

百合花「かんぱーい！」

3人、乾杯をする。百合花、乾杯のふりをする。

神子「百合花、相変わらず明るいね。唯、暗くなつた……目にクマができるけど、大丈夫そう？」

百合花「えへへー！ 生前もそうだつたからかな？」

麗華「百合花、若々しくて綺麗」

神子「麗華は、相変わらずクールで百合花には甘いね……唯と風紀委員で、生徒には厳しかつたのに……」

神子、枝豆を食べる。

麗華「ふん」

麗華と神子の間の雰囲気がぴりつとす  
る。

百合花「あ、ねえねえ！ 唯の最近の話聞かせてよ！」

取り繕うように話題を帰る百合花。

唯 「はあ。ねえみんな聞いてよ……課長なつちやつたあ。だる」

神子、酒を飲む。

唯、酒を飲んで机に突つ伏す。

神子 「すごいじやん……課長つて、だめ、なの？」

唯 「中間管理職つて超めんどくさいの……はあ」

神子 「大変、だつたね……でも、あたしがいるから、大丈夫だよ」

麗華 「神子。その地雷系の服装、まさかまだパパ活してるんじやないでしようね。やめなさいって言つたでしょ。トラブルに巻き込まれるかもしれない」

麗華、早口でまくしたてて神子を睨む。

神子 「あ、あたしは唯のためにお金を稼いでるだけもん……実家暮らしだから余裕あるし唯にお金を」

麗華 「神子！」

麗華、机を叩いて怒鳴る。神子、びく

つとする。

麗華「なんで百合花が死んだか覚えてないの  
!?」

麗華、叫ぶ。周りの客が麗華たちの方  
を向く。

○（回想）高校・教室

先生「今日、逢沢百合花さんが殺されている  
のが発見されました」

ざわざわする教室。

唯「百合花……百合花！百合花！」

麗華「う、ああ……百合花あ、百合花あ！」

神子「嘘だよね……嘘って言つてよ……！」

3人、ぽろぽろと涙を流して泣く。

（回想終わり）

○居酒屋・客席（夕方）

麗華「後からみんな知つたでしょ？百合花  
はレイプされて殺された！犯人をこの手  
で捕まえるために私は刑事になつた！私は

が百合花の無念を晴らすために……」

麗華の早口に、神子、びくつとする。

神子「あ、あたしだって、危険日とかの対策  
はしてるし……」

麗華「神子！もし犯罪に巻き込まれたらど  
うするわけ？まったく、神子が高校ん時  
からしょっぴかれなかつたのが奇跡だよ」  
百合花「まあまあ、そこらへんに」

言い合いになる麗華と神子を止める百  
合花。

百合花「みんな仲良くじやないとやだよ！  
でも麗華、うちのためにありがとう」  
唯「百合花の言う通りだよ」

麗華「はあ」

麗華、ため息をつく。

百合花「みてみてー！」

百合花を見る3人。

百合花「どうも！腹筋崩壊太郎です！」

百合花、お腹を見せてマツチヨボーイズ  
をする。

麗華「ふつ、ふふつ……あははははっ！」

唯「ちよ、ちよっと面白い……きんに君じやん」

ん」

神子「ふふつ。それ、知つてる……まだ見てる」

百合花「みんな会つてなくともまだ見てるんだ、ほんっと仲いいねー！」

神子「唯が見てたから、みんな見たんだよね……女の子なのに」

4人の間で笑いが起こる。

### ○墓地（夕方）

唯たち、逢沢家の墓の前に立っている。

唯、逢沢家の墓に水をかける。麗華、花をお供えする。神子、水いりバケツを持つている。

麗華「で、まだ犯人の顔思い出せないの？」

百合花「うん」

※ ※ ※

（フラッシュ）

アタッシュケースを開く黒服と、それを見る黒服。

※ ※

百合花「フードかぶつてたからわかんない。

でも、なんかの取引だつた気がする。どうせ麻薬とかじやない？　あー、たまたま寄つただけだし場所は覚えてないなあ」

神子「犯人わかつたら……成仏するのかな」

麗華「あ」

麗華、はつとする。

麗華「しまつた。犯人捕まえることばっか考えてて、そのこと考えてなかつた……」

唯「忘れてたんだ……」

百合花「麗華、うちのことは気にせず犯人探し！　お願い！　これからの人のためにも！」

麗華「……百合花の頼みなら」

少しくぐもつた声で答える麗華。

麗華「百合花。何かあつたら私を頼つてつて言つたのに、私がいちばん役に立てるのに、

どうして唯についてるの？ 私じゃ……だめだった？』

百合花『唯がいちばん仲良かつたから、かな？ 唯にだけついていけるみたいなんだよね。なんでこうなってるか、うちは詳しくはわかんない。まあ、こうして姿表してのも、うちの未練が関係してるんじゃないかな』

麗華『そう……百合花がいいなら否定はしないよ……』

麗華、さびしそうにうつむく。

唯「こんな暗い私が言えたことじやないけどさ……麗華、無理しないで」

麗華「なにそれ。ほんと、言えたことじやないね」

唯「ごめん……」

麗華「別に、謝らなくていいし」

百合花「それじゃ、みんなここでお別れだね

！ また会おうね！」

百合花、笑顔を向ける。

麗華 「あ、神子。これ」

麗華、神子に小さなストラップを渡す。

麗華 「胸のリボンにつけたらお似合いだよ。」

取れないようになつかりつけてね」

神子 「……あ、ありがとうございます！」

○ 佐々木宅前（夜）

一軒家の前に立つ麗華。

麗華 「ずっと百合花のことが好きだったのに  
百合花……私、どうすればいいかわか  
んなくなつちやつたよ！ 成仏するかもだ  
なんて……私、百合花にいなくなつてほし  
くない！」

麗華、ぽろぽろと涙を流す。

○（回想）高校・教室

同級生A 「麗華つてさ、真面目すぎるよね」

同級生B 「わかる。なんでも風紀風紀つてさ」

女子3人、麗華の目の前に威圧的に立  
ちふさがる。

麗華（18）「え」

同級生C「あんまさ、調子乗らないで」

女子たちから、そだそだコールが起ころ。唯、神子、心配そうに麗華を見つめる。

百合花（18）「そんなことないよ！」麗華

は、学校をよくしたいって思つてるから。みんなが大事だから委員長と風紀委員やつてるんだもんね！」

麗華たちの横から、底抜けに明るい百合花の声。

同級生A「う、わかったよ」

女子3人、麗華から離れていく。

麗華N「百合花の顔が、あまりにも明るかつた。だから、女子たちも私を責めなくなつた」

（回想終わり）

○佐々木宅前（夜）

麗華「百合花！百合花に告白しようと思つ

てたのに！ その前に死んじやうなんて：

うつ、う……」

佐藤タケシ（40）「よう」

麗華「あ、こんばんは」

麗華、涙を拭く。

麗華M「やば、聞かれた？」

タケシ「お互ひ疲れるな、刑事。はいこれ」

タケシ、麗華にコーヒーを渡す。

麗華「あ、どうも」

麗華、軽く会釈して自宅に入る。タケシ、どこかに歩いていく。

○アパート（夜）

唯、階段をのぼる。百合花、唯にくつついている。

唯、鍵を開け中へ入る。

○アパート香椎宅・居間（夜）

唯、部屋の電気をつける。

部屋はかなり散らかっている。

百合花、部屋を飛び回る。

百合花「部屋片づけないの？」

唯「いいや、別に……めんどくさい」

唯、ソファに座つてリラックスした体勢になる。

インター ホンが鳴る。

唯「はーい」

唯、扉を開ける。目の前に神子が立つて いる。

唯「ん？ 何しに来たの？ さつき別れなかつたつけ……」

神子「と、泊まつても、いい、かな？」

唯「ああそういう。いいよ、あがつて」

神子「あ、ありがとう……」

神子、靴を脱いで部屋にあがる。

唯「でも、もう寝るから」

神子「うん……それで、いいよ」

○ 同・寝室（夜）

唯と神子、同じベッドで同じ布団に入

つて向かい合っている。百合花、唯に  
くつついでいる。

神子「お泊まり会、ひさしぶりだね……邪魔  
してごめんね、唯、疲れてるのに」

神子、申し訳なさそうな表情をする。  
唯「ああ、気にしないで……」

神子「優しいね、唯」  
唯「……そうかな」

百合花「おやすみー」

唯と百合花、眠りにつく。  
しばらくして。

神子「唯……」

○（回想）小学校・教室

神子M「あたしは昔からとろかつた。あと、  
顔がかわいいって理由で、いじめられた」

神子（12）、「女子たちにいじめられ  
ている。」

唯（12）、「こら！ やめろ！」

唯、叫ぶ。

女子たち、逃げていく。

唯 「神子、大丈夫?」

神子 M 「かっこいい……」

(回想終わり)

○アパート香椎宅・寝室(夜)

神子、にやにや笑っている。

インターホンが鳴る。

神子 「誰、だろ」

神子、立ち上がる。

○同・玄関(夜)

中島タクヤ(40)の声 「宅配便でーす」

神子 「あ、今あけます……」

神子、扉を開ける。

タクヤと男数人が立っている。

神子 「え」

タクヤ 「間近で見たら、写真通りの上玉だな

⋮⋮連れていけ」

タクヤの指示で、神子、腕をつかまれ

る。

神子「い、いや、離して！離して！」

神子、抵抗する。タクヤ、ナイフを突きつける。

タクヤ「静かにしろ」

タクヤ、スタンガンを神子に食らわせる。神子、気絶。

○アパート前

男たち、神子を運んで車に乗せる。

タクヤ、車に乗る。車、発進する。

○アパート香椎宅・寝室（朝）

唯、ゆっくりとまぶたを開ける。

唯「あれ……神子、帰ったんだ。百合花、見てない？」

百合花「さあ、寝てた。でもさ、あんなに唯にくつついてた神子がそんな勝手に帰るかな？　タイミング悪くない？」

唯「うーん……」

唯、時計を見る。

※ ※ ※

(フラッシュ)

居酒屋で話をしている唯たち。

※ ※ ※

唯  
「まさか」

唯、急いでベッドに置いているスマホ  
を手に取る。

神子にメッセージを送る。

唯  
「あの神子が反応なし……」

スマホで電話をかける。

唯  
「ダメだ」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華、朝食を食べている。

麗華のスマホが鳴る。画面に、唯のL

I N Eアカウントが表示されている。

麗華  
「唯？」

麗華、着信に応答。

唯の声  
「大変なの。神子をうちに泊めてたん

だけど、いなくなつちやつて」

麗華「帰つただけなんじやないの？」

唯の声「神子ならよく私にくつついてたでしょ。帰れなんて言つてないし、だつたらおかしいんじやない」

麗華「わかつた。じやあ通報しとけば？」

○アパート香椎宅・寝室（朝）

唯、通話を切られる。

唯「切られた……はあ。麗華つてきつちりしててけつこうなんでもできたから、とろい神子を、よく思つてないとこあつたからなあ……地雷系になつてまで友達のために金稼ぐなんて、友達想いが変な方向に行つてる」

百合花「友達想い、ね」

唯「どうかした？」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華「……ちよつと冷たかったかな」

麗華、スマホを見つめる。

麗華「佐藤先輩に連絡しておくか」

麗華、スマホから電話をかける。

タケシの声「どうした？」

麗華「（早口めで）実は、友達が攫われたかもしれない。名前は時乃神子30歳。地雷系女子でパパ活をしている。30なのに20前半くらい顔がいいからそれで攫われたかも」

タケシの声「お、おう。早口だな。そんなに心配なのか？」

麗華「な、そんなわけないでしよう」

タケシの声「ひどいな」

麗華「いや、そういうことではなくて……つ

て、ああもう心配です！友達を見つけて

ください！」

タケシの声「見つけてください、じゃないだ

ろう」

麗華「あ。えっと、見つけましょう！」

タケシの声「おう」

通話終了。

麗華「はあ。まつたく、迷惑かけて。昔から、  
ところて人のあとついてくるだけだつたと  
こ変わつてない。でも……」

麗華、スワイプして神子とのトーグル  
ームを開く。友達っぽい楽しそうなメ  
ッセージがある。

麗華「心配、なのかなあ」

○（回想）山道

4人組とその親たち、山道をのぼつて  
いる。

神子、遅れている。苦しそうに息を荒  
くしている。

麗華「神子、遅い。早くしないとみんな空腹  
で倒れちやう。早くして」

麗華、後ろの神子を見る。

百合花「まあま、せつかくの唯の18ハビバ

遠足なんだし、楽しもつ！」

百合花、麗華に笑顔を向けながら歩い

で い る 。

麗 華 「 つ 」

麗 華 、 百 合 花 か ら 視 線 を 逸 ら し て 頬 を  
赤 ら め る 。

（ 回 想 終 わ り ）

○ 佐 々 木 宅 ・ 居 間 （ 朝 ）

麗 華 「 あ の 時 の 百 合 花 が 優 し く て 、 か わ い く  
て 、 好 き に な つ た 。 恋 を 自 覚 し た ⋮⋮ 私 も 、  
も つ と 優 し く な る ベ き だ な あ 」

麗 華 、 し ょ ん ぼ り と す る 。

※ ※ ※

（ フ ラ ン シ ュ ）

居 酒 屋 で 、 神 子 に 怒 鳴 る 麗 華 。

※ ※ ※

麗 華 「 あ ⋮ ⋮ 」

麗 華 、 は つ と し た 頤 に な る 。

麗 華 「 私 、 神 子 に パ パ 活 し て る の を 怒 つ た 。

心 配 だ つ た か ら ⋮ ⋮ ⋮ そ つ か 。 友 達 だ か ら か 。

今 更 何 言 つ て る ん だ ろ う 。 唯 が 、 4 人 は 一

生友達って言つてたのに」

※ ※ ※

(フラッシュ)

神子にストラップを渡す麗華。

※ ※ ※

麗華「なるほど。心配なわけだ。友達……か」

○交番・中（朝）

唯、事情説明中。

唯「つてわけなんです……」

交番警官「といつてもねえ……それは帰つただけに聞こえるけどねえ。地雷系なら、パパ活でもしてるんじゃないのか？」

唯。言葉に詰まる。

○大通り（朝）

唯「だめだ、友達がパパ活なんて言えない……けど絶対パパ活な気がする……麗華なら知つてる刑事だから調べてくれてもいいのに……」

唯、いつもより暗い顔になつてゐる。

百合花「まあ。変わつてなかつたしねえ。神子かわいかつたから、攫われたりするかも。」

パパ活やつてたらなおさら？」

唯 M 「？」

唯、胸を押さえる。

唯 M 「なんだろ……」

唯のスマホから着信音が鳴る。

唯、応答する。

唯「麗華？」

○佐々木宅・居間（朝）

麗華、スマホを耳元にあてており、

麗華「全部警察の先輩に言つたから心配しないで。パパ活のことも言つたけど殺されようリマシ。わかつた？」

と、早口でまくしたてる。

唯の声「よかつた」

麗華「怒つてないの？」

唯の声「なにが？」

麗華「いや、私ことあるごとに神子に何か言ったてたじやん」

唯の声「それは、麗華が神子を心配してるからだよ」

麗華「そう、なの？」

唯の声「うん。麗華は優しいって私たちみんなわかつてるから、もし何か思いつめてるなら、私たちを頼つて。麗華焦ると早口になるから」

麗華「唯……」

麗華の頬を、涙が伝う。

唯の声「って、焦ると早口はみんなそうか。」

麗華は冷静クールだから、焦ると目立つんだ。昨日の飲み会で思つたけど、私たちのことになるとすぐ焦るんだね」

麗華「わかつたから……唯も、気を付けて。ボランティアばつかしてると倒れるよ」

麗華、泣きながらにこつと笑う。

通話を切り、涙を拭く。

○丸井組ビル・2階（朝）

丸井太郎（55）、縛られている神子をねつとりとした視線で眺めている。

その横に中島タクヤ（40）が立つている。

太郎「この写真、お前だよな？」

太郎、スマホの画像を見せる。

画面に。神子がハゲのおじさんにフェラしている画像が映っている。

神子「あ……と、撮られて、た？ そんな、ホテルに、カメラなんてあるの？」

神子、震えながら顔面蒼白になる。胸のストラップをぎゅっと握りしめる。

太郎「コネってやつさ。知り合いに議員がいてな。この程度の犯罪は揉み消せるんだ」

神子「あ、あ、あ……」

神子、うつむいて泣き始める。

太郎「かわいいがどうせ傷ものなんだ。試してもかまわねえよなあ……？」

太郎、舌なめずりして神子に迫る。

○ 大通り（夕方）

大通りを走っているパトカー。

麗華、ハンドルを指でトントン叩きながらパトカーを運転している。

麗華「突撃捜査の令状取るのに時間がかった！くそっ！」

刑事「丸井組は脅威と認知されているので、取れてラッキーでは？」

麗華「ラッキーじゃない！当然の結果！

とにかく！、佐藤先輩も向かってるはず！

行くよ！」

刑事「はい！」

麗華「神子……死なないでよ！」

麗華、鋭い視線で前を見る。

○ 住宅街・丸井組ビル付近（夕方）

パトカーを離れたところに停め、影から丸井組ビルの様子を伺っている。

特殊部隊が、盾とライフルで武装して

いる。

タケシ「おう、来たか」

麗華「先輩！」

タケシ「丸井組、麻薬や人身売買などをやっているが、なかなかやつらをしょっぴけていない……」

麗華「背後に何者かがいるのでしょうかね……」

タケシ「奴らに気づかれない方向からいくぞ」

○丸井組ビル・2階

ヤクザA、勢いよく扉を開けて入室。

ヤクザA「組長！ サツです！」

太郎「何？」

タクヤ「どうしますか？」

太郎「迎え撃て！」

太郎の掛け声を皮切りに、ヤクザたち銃を手に取る。

特殊部隊たち、盾を持って入ってくる。

神子、麗華の姿を見つける。

神子「麗華……」

麗華 「神子、もう大丈夫だから」

タケシ 「G O！」

タケシと麗華、拳銃で神子の近くのヤクザを撃つ。

麗華、銃弾をかいぐりながら神子のもとに素早く移動し覆いかぶさる。

ヤクザ B 「くそつ！」

ヤクザ B、麗華に銃を向ける。

麗華 「はあっ！」

麗華、神子に覆いかぶさりながら振り向きざまに発砲。ヤクザ B、倒れる。

ヤクザ、太郎以外全員倒れる。

太郎 「くそ！」

麗華 「させるか！」

太郎、麗華の発砲で銃を落とす。

タケシ 「確保！」

タケシ、太郎に覆いかぶさる。

麗華 「神子！ もう大丈夫だからね！」

麗華、神子を抱きしめる。

神子 「あ、ありがと……うわあああん！」

神子、泣きじやくる。

○ 丸井組ビル前（夕方）

ヤクザたち、警察たちにパトカーに乗せられる。

タケシ「周りにも残りがいないか捜索しろ！」

警官たち「は！」

警官たち、ビル周辺に走っていく。

タケシ「ふう。令状が出てよかつた」

麗華「丸井組はここら地域にとつては脅威でしたからね……」

神子「れ、麗華……」

神子、ふるふる震えている。

麗華「神子。もう大丈夫」

麗華、神子をなでる。

タケシ「だが、今までいろいろ揉み消されてきたから、安心はしきれない」

タケシ、麗華に耳打ちする。

麗華「ええ」

○高校・中庭（夕方）

唯、しゃがんで花壇の手入れをしながら通話中。百合花、唯にくつついている。

麗華の声「神子には、精神状態を考慮してこっちの方でカウンセリング受けさせるから」

唯「そ、う、な、ん、だ。あり、が、と、う、麗華」

麗華の声「うん」

通話が切れる。

唯、じようろで花壇に水をまく。

サツカ一郎員A「あ、いたぜ！」

サツカ一郎員B「お！握手してもらおうぜ

！」

サツカ一郎員たちが唯のもとへ駆け寄

つてくる。

百合花、握手の動作をしていく。

名木野恭平（50）「おい、花壇の世話を

くれてるんだからあまり迷惑かけるなよ！」

さつさと着替えて帰宅しろー！」

恭平、部員たちに向かって叫ぶ。部員

たち、唯と百合花のもとから立ち去る。

恭平「久しぶりだな、少し話すか」

恭平、唯のもとに歩いてくる。

唯「まだいたんですか、すごいですね」

恭平「転勤とかはしてるさ。今たまたまここに戻ってきただけで」

唯「そうなんですね……」

恭平「目にクマができるけど大丈夫か。香椎、俺のクラスだった頃から、誰もやりたがらないから学級委員と風紀の兼任とかしてただろ。」

唯「……大丈夫です。あと、麗華は率先して立候補してましたよ。どっちも2人だったから、どっちも私と麗華で」

恭平「そういえばそうだったな」

恭平、少し笑う。

唯、土を手入れしている。

恭平「俺には、大事な弟がいたんだ」

唯「ああ、なんか言つてましたね」

恭平「けど、逮捕されてな」

唯 「え、それは初耳です」

唯、立ち上がる。

恭平 「卒業ちようどくらいいの時期だつたからな。あんまり言いづらいんだが……未成年に手を出したんだ」

百合花 「せんせ、それ年齢差すごくない？」

せんせの弟でしょ？」

恭平 「だから有罪になつた。未成年のほうが年齢を偽つてたから悪くないと弟は主張したんだが、未成年を襲つたのは卑劣だつてんで、裁判で勝てるわけがなかつた」

恭平、寂しそうな顔になる。

恭平 「弟にも下心があつただろうが、俺は弟が受けた罪は不当だと思つてる。それと……逢沢、苦労しただろう。まだ犯人は見つかつてないんだろ？」

百合花 「うちは大丈夫だよ、せんせ。唯がいるし、それにもうちを殺した犯人もきっと麗華が捕まえてくれるから！」

恭平 「佐々木らしいな」

唯 「あ、LINE 交換してください」

恭平 「妻がいるんだけど」

唯 「そうじやなくて、部員の寿司の好み聞い  
といてください。近いうちパーティーでも  
どうですか。育ち盛りでしょう」

恭平 「そうか、悪いな」

2人、LINE 交換。

恭平 「気をつけて帰れよ」

百合花 「はい！」

唯と百合花、歩き出す。

百合花、恭平に手を振る。

恭平 「まさか、まだ一緒にいたとはな」

○カウンセリングルーム（夜）

神子とカウンセラーが、椅子に座つて  
机越しに向かい合つている。

カウンセラー 「大丈夫？ 怖くなかった？」

神子 「う、うん」

カウンセラー 「問題なさそうね」

○電車（朝）

唯、満員電車の椅子に座っている。

唯「はあ……あのあと神子は逮捕とかされずに帰されたって聞いたけど、結局いつもの日常に元通りだ……だる。眠い……朝早い、動きたくない……課長とか最悪……ヒラでよかつたのに……」

唯、だるそうな顔になつていて。百合花、唯にくつついている。

百合花「唯がみんな助けるとこ、かつこいいよ」

唯「人助けは、余裕あるからできるんじやん……」

百合花「唯の性格なら、余裕なくともやつてる。そういうとこ、かつこよくてすきだな」

唯「あつそ……」

○会社、オフィス（朝）

唯、扉を開けてオフィスに入室し、

唯「おはようございまーす……」

気だるげな挨拶をする。

唯 M 「百合花の未練見つける時間が必要なのに……」

唯 、とぼとぼと課長の席に座る。  
仕事が始まつてしまらくして。

サラリーマン B 「あの、ここを」

唯 「うんうん、えっと」

唯 、渡された資料を見る。

唯 「いい感じだと思う、このまま続けて」  
サラリーマン C 「すみません、来てください

！」

唯 「なに？」

サラリーマン C 「ここなんですが……」

それからしばらく、部下のサポートを  
主に仕事する唯。

○アパート香椎宅・玄関（夜）

玄関の扉を開け、中に入る。

唯 「ただいま……」

○ 同・居間（夜）

唯、ソファに倒れ込む。

百合花「唯……唯！？ 唯つ！」

百合花、焦つて唯をゆすろうとするが  
体が透ける。

唯の体から聞こえる寝息。

百合花「寝てるだけか……唯、お疲れ様」

百合花、唯をやさしくなでる。

百合花「晩飯……は会社で食べてたね。唯、  
ほんつとすごいね……」

○ 名木野宅・居間

こども2人を持つ名木野家族、晩ごは  
ん中。食卓に色々なおかずが並んでい  
る。

名木野航大（10）「パパ、あしたね、おと

もだちのとこ遊びに行く！」

恭平「そうか、いってらっしゃい」

恭平、料理を口に運ぶ。

名木野澪（8）「日曜はパパと遊ぶ！」

恭平「そうかそうか」

恭平、子供たちの頭をなでる。

恭平「そつちはどうだ？」

名木野明日香（44）「最近、課長が変わったの」

恭平「へえ」

明日香「香椎唯って人なんだけど」

恭平「まじか……俺の教え子だ。じゃあ、圭と陽太郎と同じ会社だつたつてことか」

明日香「懐かしいわ。陽太郎があなたを紹介してくれたんだよね」

恭平「ああ。圭にも見せてやりたかった」

○ 同・居間（朝）

T「土曜日」

時計が9時半を示している。

唯「また寝落ちか……とりあえず朝食べないと……仕事ないと起きるのおっそいなあ」

唯、トーストを作る。それを食べながら寿司を作っている。

百合花「なに作ってるの？」

唯「寿司の盛り合わせ。サツカーレ部に差し入れ。名木野先生には恩があるし」

百合花「なんでわざわざ手作りを？」

唯「そのために、先生から部員の寿司の好み聞いた。あと、なんか手作りしたかった」

百合花「そっか。ちょっとつまみ食いしたら？」

唯「サツカーレ部に……」

百合花「食べて」

百合花、唯に真顔を向ける。

唯「え、百合花は食べれな」

百合花「いいから。2つね」

百合花。少し怒ったような表情を向ける。

唯「わ、わかったよ……」

唯、寿司のたまごと炙りサーモンチーズを1つ口に放り込む。

百合花「うんうん、それでよし！ 唯ってほんと、たまご好きだね！」

百合花、にこにこ顔になつて唯の頭をなでなでする。

唯「部員の数は数えてないから、比率は大体。

さすがに細かく数えんのめんどくさいから」

百合花「差し入れ作るのも充分……いや、それと言うのは野暮かな」

唯「バーベキューミたいにテキトーにとつてもらうシステムにする」

### ○高校・校門（朝）

女子生徒3人と男子生徒2人、箱を持

つて立つている。

唯「はい、これ」

唯、募金箱に万札を入れる。

女子生徒A「直接どこかに募金しないんですか？」

唯「ううん。あなたたちの行動に応えたいと思つたから。その方が、あなたたちも褒められる」

女子生徒A「あ、ありがとうございます……」

○高校・グラウンド（朝）

グラウンドで、サッカー部が練習中。

百合花「唯、前より顔色悪くなつてない？」

唯「そう？ 別に、普通だと、思うけど」

恭平「わざわざ悪いな」

唯「いいんです。先生は恩師ですから……みんながんばってますね」

サッカー部の練習を眺める唯。

○同・教室

恭平「香椎さんが、寿司を作つてくださつた。

みんな感謝して頂きますを言いなさい」

部員たち「いただきまーす！」

部員A「うめえー！ すげー！」

部員B「これ俺の！」

部員たち、感嘆の声を漏らしながら寿司を食べる。

唯「よかつた……」

唯、しんみりとした表情になる。

恭平 「香椎も食べたら？」

唯 「いえ、昼は友達と……」

唯 、百合花の厳しそうな表情に気づく。

唯 「た、食べます」

唯と恭平、席について寿司を食べ始め  
る。

恭平 「ところで、時乃は何してるんだ？」

唯 「元気になりますよ」

恭平 「そうか……」

恭平 、寿司をじっと見つめる。

唯 「それじや。みんなと会う約束があるので」

唯と百合花、教室を出る。

### ○ フアミレス前

唯 、百合花、神子、麗華、フアミレス

前に集まっている。

唯 、いつになくげつそりしている。

唯 「みんな集まってくれてありがとう。神子、

大丈夫だった？」

神子 「うん。大丈夫、だよ」

麗華 「百合花が自分を殺した犯人を探したいって言つたんだって？」

唯 「うん。どうしてもつて。それで、みんなと一緒にいる時間を1分1秒でも大事にしたいって。だから、みんなで探すことになつたの」

麗華M 「やつぱり、犯人を見つけると成仏しちやう……その前に、百合花が幽霊でもいいから告白したい……けど、そんなことしたら、関係が壊れちやう……」

百合花「どうしたの？ 何かなやみごと？」

百合花、にこにこ顔で麗華の顔を覗き込む。

麗華 「ううん、なんでも……百合花、ほんと優しいね。百合花のためにも、探してやりますか」

神子「うん……」

百合花「みんな、ほんとにうちの未練は気にしないでね！」

唯「うん……」

麗華 「でも、寂しいよ……」

麗華 うつむく。

### ○ フアミレス・中

唯たち、メニュー表を見ている。

百合花 「麗華がそんな顔見せるなんて珍しく」

麗華 「だつて、百合花は、その……」

麗華 口ごもる。

百合花 「ふんふん。それで？」

百合花 にこにこしながら麗華を見る。

麗華 「つ、と、友達、だもん……」

恥ずかしそうに声を絞り出す麗華。

百合花 「えへへ！」

神子 「素直……だね」

唯 「麗華がデレるところつてあんま見ないよ

ね！」

麗華 「ちや、茶化さないでつ！ 店員呼ぶよ

つ！」

ピンポン音が鳴り響く。

店員 「ご注文をお伺いします」

唯「これ3つください。あと、デザートにグランドチョコレートパフェを1つ」

店員、メモを取つてからその場を去る。

唯「麗華、そっち何か情報出た?」

麗華「情報つて?」

唯「ほら、私たちに教えてくれたじやん。丸井組が神子を、つて」

麗華「そういうのはあんまり外部に漏らせないから。それに……」

唯「それに?」

麗華「私……免職になつたから。新しい情報に期待しないで」

唯「免職……」

神子「めんしょく、つて、どういうこと?」

唯「警察のことよく知らないけど、たぶんクビになつたつてこと。なんで」

麗華「焦つてて、GPS捜査の令状を取り忘れた。つまり、許可の出てない捜査をしたつてこと」

神子「どうして、そんな。麗華、らしくない

よ……」

神子、心配そうに麗華を見つめるが、  
麗華「神子が！ 神子がとろいから心配だつ  
たの！ それにつけてたの！」

麗華、神子の胸のリボンについたスト  
ラップを指さす。  
麗華「神子が！ 神子がとろいから心配だつ  
たの！ それにつけてたの！」

○（回想）墓地（夕方）

麗華「あ、神子。これ」

麗華、神子に小さなストラップを渡す。

麗華「胸のリボンにつけたらお似合いだよ。  
取れないようにしつかりつけてね」

神子「……あ、ありがとう……！」

麗華M「G P Sを取り付けた……これで、神  
子に何かあつても場所がわかる」

（回想終わり）

○ファミレス・中

麗華「神子ずっと昔からとろかつたよね！？  
だからそれつけないと心配だつた！ 早

く助けたいって一心で、許可取らなくて私はクビになつた！」

叫ぶ麗華。

麗華のほうを向く客たち。すぐに視線を戻す。

神子「ご、ごめんね……こんな、こんなとろい友達なんか、いらないよね……」

神子、目をうるませながらうつむく。

麗華「ばか！」

神子「ひつ」

麗華怒鳴る。神子、びくつとする。

麗華「友達が心配だつたって言つてんの！」

ほんつと神子つてとろいよね！ そういうどこが嫌いだつた！」

神子「ごめんね、ごめんね……」

神子、ぽろぽろと涙を流す。

麗華「ごめん、帰る」

麗華、席を立つ。

自動ドアが開く。麗華、店の外に出て

歩き去る。

○大通り

麗華「つ……ううつ！」

麗華、目を腕で覆いながら歯を食いしばつて泣いている。

麗華「百合花にあんな姿さらしちやつた……嫌われた！もう百合花にも神子にも会えない！」

○ファミレス・中

百合花「神子、気にしないで」

百合花、神子を優しくなでる。

百合花「麗華、クールだけど大事な友達のこ  
とになつたらああなるからねえ。すつごい  
優しいけど、それを表に出したくないっぽ  
い」

神子「やさしい。けど、あたしよりも、不器  
用……」

唯「麗華……」

○ 佐々木宅・居間

麗華 「びあああああああ！」

麗華、ソファに突つ伏して大泣きしている。

麗華 「ああああああああ！」 百合花あ！

神子！ 唯！

○ フアミレス前

唯 「麗華……思いつめてた。私たちのことでの

神子 「行こう……」

唯 「うんうん。あんな麗華、見捨てられないから」

百合花 「お！ 見捨てられない！ 唯の本領  
發揮だね！」

○ 佐々木宅・居間

麗華 「ううつ、百合花あ……」

インター ホンが鳴る。

麗華、起き上がって玄関に向かう。

○ 佐々木宅前

3人、心配そうな表情で佐々木宅前に立っている。

玄関扉が開く。麗華が家から出てくる。

麗華「え、みんな」

神子「ごめんね、麗華、しんどくなるまで頑張つてるのに気づかなくて……あたしのためには、ありがとう。だから、泣かないで」

神子、涙ながらに訴える。

唯「麗華。麗華は、自分のことよりも神子のことを第一に考えてくれた。その気持ちが、すっごい嬉しいよ」

百合花「そそ！だからさ、スマイルなつてよ」

麗華「百合花は私の……気づいてないの？」

麗華の頬を涙が伝う。

百合花「え？」

麗華「成仏のこと言われて気づいた後……私、

百合花が成仏するのが嫌で、犯人の捜査にためらつてたの。だから、刑事としてそれ

がよくないと思つて……令状忘れてるのに

気づいた時、ほつとしちやつたの……」

百合花「麗華……どうしてそこまで」

麗華「気づいてなかつたんだね……」

麗華、百合花の手を取ろうとする。

麗華「私……百合花のことが、ずっと好きだつたの……大好きだつたの！ それなのに死んじやつて、どうすればいいかわからなかつたの！」

3人「え」

3人、驚き呆然とする。

麗華「ごめんね、こんな告白になつちやつて

……」

百合花「麗華」

麗華「百合花……みんな……私、どうすればいいの？」

百合花「ごめんね、その気持ちにこたえてあげられなくて。でも、ずうつと、3人とも大好きだから……だから、もう泣かないで

よ……」

百合花、麗華に抱きつく動作をして涙を流す。唯と神子、それを見てつられて涙を流す。

麗華「百合花ああああ！」

麗華、大声をあげて泣き叫ぶ。

百合花「ごめん、ごめんね……」

唯「2人とも……」

唯、涙をぬぐつて2人に触れる。

麗華「う、ひつく。ごめん……見つけよう。

百合花を殺した犯人」

百合花「うん、お願ひ」

麗華「にしても百合花、葛藤ないね……」

麗華、袖で涙を拭く。

百合花「そう？」

麗華「なんか、成仏が怖くない感じ」

百合花「あ、そ、それはね……」

唯「なんか、動搖してる？」

神子「それ、思つた」

百合花「なな、何言つてるのも？」

麗華「まあいいけど」

○アパート香椎宅・夜

唯「…」

唯、ぼーっとしている。

百合花「おーい」

唯、ぼーっとしている。

百合花「おーい！」

唯、ぼーっとしている。胸を押さえて

呼吸を荒くしている。

百合花「こら！聞け！」

唯「あ、ごめん」

百合花「もー、怖いことしないで」

唯「大丈夫」

○電車（朝）

唯、胸を押さえている。

○会社・オフィス（朝）

唯「おはようございまーす：：：」

唯、胸を押さえている。

浅野陽太郎（48）「大丈夫ですか？」

唯「え、だいじょう、ぶ」

陽太郎「怖いです。病院行きますよ」

唯「え、みんなが」

陽太郎「がんばりすぎなんですって香椎さん。  
おかげで僕より出世しますし」

唯「それは、どうも」

陽太郎「とにかく！ 行きますよ！」

陽太郎、苦しそうな唯に肩を貸す。

### ○車の中（朝）

陽太郎、唯を車に乗せる。自分も車に  
乗り、ドアを閉め、車を発進させる。

唯、ゆっくりと目を閉じる。

百合花「…寝ただけか」

### ○どこかの倉庫・中

唯、ゆっくりと目を覚ます。

唯「あれ、ここ、は」

唯、縄で縛られている。

百合花「唯！ 大変！」

唯「ゆり、か」

百合花「あの人、誘拐犯だつた！」

唯「え…浅野さん、が？」

百合花「ほら見て！」

百合花が示した先に、陽太郎と恭平が  
いる。

陽太郎「香椎さん、すみません。恭平には恩  
があつて、恭平の頼みで拉致させてもらい  
ました。」

唯「え、名木野先生…はあ、はあ。なん、  
で」

恭平「悪いな、香椎。俺は、弟の復習をしな  
きやならないんだ」

恭平、怒りを含んだ真顔になつてゐる。

恭平「香椎には、ある人物をおびき出す餌に  
なつてもらう」

唯「え、誰の…」

恭平「俺の話を覚えてるか。弟は、年齢を偽  
つた未成年と行為に及んで逮捕されたつて」

唯「それがどうしたんですか、はあ、はあ」

恭平「思い当たらぬか？ 香椎の身近に、

援助交際⋮⋮パパ活をしている人物がいる

ことを」

唯「ま、まさ、か⋮⋮」

恭平「そうだ。そして、弟からそいつの電話

番号を教えてもらつている」

恭平、スマホを取り出す。

### ○アパート時乃宅・居間

神子のスマホから着信音が鳴る。

神子「はい、どなたでしようか」

恭平の声「時乃。香椎を連れ去つた。返して  
ほしければ、今からいう場所に来い。1人  
でだ」

神子「え、誰なの」

恭平の声「俺だよ、名木野恭平」

神子「え、先生⋮⋮？」

恭平の声「従わないよ、香椎の命はない。な  
ぜかしんどそうだから、早く来た方がいい。

場所は、○○倉庫だ」

○ どこかの倉庫・中

恭平「お前たち仲良かつたよなあ」

唯「や、やめ、て……」

恭平「黙れ！俺は、弟が誰より大事なんだ！」

○ (回想) 商店街

恭平(8)「圭！見ろ！レアカード当たったぜ！」

恭平と名木野圭(6)、店の前でカードが入った袋を開封している。

圭「すっげー！」

恭平「帰つてバトルしようぜ！」

○ 名木野宅・居間

恭平「よっしゃ！勝つたぜ！」

圭「くっそ！もっかいだ」

恭平「圭は俺に勝てないよーだ」

圭「くつそ！」

恭平「……ははつ」

圭「はつははははは！ お兄ちゃんとカーボゲ

ームするの楽しいな！」

2人、笑いあう。

○名木野宅・居間

大人になつた恭平。

恭平「な、圭が逮捕された？」

（回想終わり）

○どこかの倉庫・中

恭平「そんな弟が、あいつのちょっとした嘘で地獄に落とされた！ 面会に行つても、ああとかおおとかしか答えない！ 弟はいやつだ！ きっと、成人じやなかつたら手を出さなかつたし、純粋な気持ちだつた！」

唯「そんな……先生……」

百合花「神子、ここまでして金を……」

恭平「どうだ！ これでも俺が悪いか？」

唯「悪いですよ！」

唯、おもいつきり叫ぶ。

唯「たしかにお氣の毒です……けど、けど！  
こんなこと許されないです！ ごほつ！」

唯、せき込む。

百合花「唯！」

唯「大丈夫、心配しないで……」

恭平「学校以外だと見えないが、逢沢も来て  
るんだな」

唯「なんでそんなに覚えてくれてのに、こ  
んなひどいことを？」

恭平「弟がどれだけ大事か！ お前たちには  
わからない！」

唯「だったら、友達が大事な私の気持ちもわ  
かつてくださいよ！」

恭平「うるさい！ だま」

神子「先生やめて！」

恭平、唯、百合花、陽太郎が振り向く。  
その方向に、神子が立っている。

神子「ごめんなさい、どうしてもお金が欲しくて……」

恭平「ふざけるな！」

恭平、大きく叫ぶ。包丁を取り出し、  
神子に向ける。

神子「ごめんなさい、ごめんなさい……」

神子、土下座する。

恭平「そんなちんけな謝罪で弟が帰つてくる  
と思うな！」

神子「あたしにも大事な人が……」

恭平「うるせえ！」

神子「だから、大事な人がいるのにこんなこ  
として、本当にごめんなさい……」

涙が地面に落ち、地面が濡れる。

神子「ごめんなさい、ごめんなさい……ご  
めんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

⋮

神子、土下座の姿勢を崩さない。

物陰に隠れて いる何者か。

○ 同・中

神子 「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめん  
なさい……」

唯 「神子……なんでそこまでして私のために  
金を……あれ、そういえば、私のためにつ  
て言つてたつけ？」

神子 「うん……」

神子、立ち上がる。

唯 「え、えっと……」

神子 「唯に嫌われちゃって、かなしいなあ。

好きだったのに……」

○ (回想) 小学校・教室

神子M 「あたしは昔からとろかっただ。あと、  
顔がかわいいって理由で、いじめられた」  
神子 (12)、「女子たちにいじめられ  
て いる。」

唯 (12)、「こら！ やめろ！」

唯、叫ぶ。

女子たち、逃げていく。

唯「神子、大丈夫?」

神子M「かっこいい……」

(回想終わり)

○どこかの倉庫・中

唯「神子……」

百合花、胸に手を当てる。

恭平「ほんと時乃はずるいな! 僕が香椎に恩があることも知つて、香椎が悲しむよううに、香椎が好きって出まかせを言つたんだろ!」

神子「違う! ほんとのほんとに好きだもん!」

恭平「……まさか。まあやたら仲良かった気はするが」

神子「ごめんね、唯。とろい私には、パパ活しかできなかつた……気持ちがね、抑えられなくて、それで嘘ついたやつた。唯ね、

ずっとね、みんなのためにがんばってたからね、疲れてるんじゃないかなって。だから、

あたしがお金をね、稼いであげたかったの

……

唯 「そうだったんだ……先生、ごほつ！ 先生も、大事な人を大事に思う気持ちがありますよね？ はあっ、はあ！ どうか……」  
神子を、許して、やつて、くれ、ませんか  
……

唯、胸を両手でぎゅっと掴む。徐々に息が荒くなってきている。

恭平「俺は……弟が大事だ。そこは譲れない。だが、サツカーペ顧問として、香椎に恩がある。これは本心だ。だから」

恭平、唯の縄をほどく。

太郎「はいそこまでー」

倉庫に、丸井太郎とヤクザ一行が入つてくる。

一同、丸井太郎の方に向く。

神子「丸井さん……来てくれたんだ。事務所

への連絡、気づいてくれたんだ」

唯 「え、神子……嘘、でしょ？」

神子「唯……やつぱりあたし、お金がほしい」

唯 「なんで！ 嘘だって言つてよ！ いや、

そんなことよりなんでヤクザがここに」

太郎 「知り合いの議員が出してくれたのさ。

武器は没収されちまつたがなあ。だから再び、お前を攫いに来た。それと、時乃神子から聞かれたんだが……逢沢百合花を殺したのは俺だ。最近ニュースになつたやつもなあ。ま、もみ消してもらつてるから俺だつてばれることはないが」

太郎、神子をじーっと眺めて舌なめずりをする。

唯 「お前……！」

百合花 「こ、こいつが……」

唯と百合花、怒りのまなざしを太郎に向ける。

太郎 「ありがとうよ、乱交パーティーに誘つてくれてよ。おあずけくらつてたからなあ。

楽しませてくれや……」

太郎、ニヤリと笑う。

恭平と唯、神子の前に立つ。

恭平「時乃是、大事な、俺の、生徒だ……！」  
唯「神子は、私が……守る。ヤクザなんかと、  
パパ活、させない……！」

太郎「お前らは死ね——」

鳴り響く銃声。

太郎「ぎやあっ！」

太郎の肩から血が飛び散る。

唯が振り向くと、視界に銃を持つている私服の麗華の姿が映る。

倉庫に、警官たちが入ってくる。

麗華「神子！ 大丈夫だつた？」

タケシ「捕らえろ！」

警官たち、警棒でヤクザと応戦。次々

とヤクザを捕らえていく。

太郎「く、くつそおおおお！」

太郎、手錠をされた状態で叫ぶ。

タケシ、恭平に手錠をかける。

神子「また、ひつかかったね。こんどは、盗聴器を自分につけてるんだよ」

太郎「きつさまあつ！」

太郎、吠える。

麗華、神子のもとへ早歩き。

麗華「こんのバカ！」

神子「いだつ」

麗華、神子に平手打ちする。

唯「ちよ、ちよっとなにしてるの」

麗華「神子、自分をおとりにしてこいつらをここにおびきよせたの！」

○（回想）佐々木宅・居間

麗華、通話中。

麗華「え、唯が名木野先生に拉致られた？」  
神子の声「うん。それで、今から丸井組に電話かけて○○倉庫におびきだそうと思うの。  
麗華たちは、先に倉庫の近くに行つて隠れててて」

○どこかの倉庫・外周

物陰に隠れて入口を見ている麗華、タケシ、警官たち。

(回想終わり)

○同・中

唯「神子！ 危ないよ！」

神子「でも、こいつが百合花を殺したって言つてた。だから、捕まえなきやつて」

麗華「バカつつつ！」

麗華、叫ぶ。

麗華「犯罪がもみ消される丸井太郎を捕まえる千載一遇のチャンスだったからそれにのつかつただけだから！」

神子「う、う、ふえええええ。ごめんなさいいいいい」

神子、泣き出す。

麗華「もう…神子が無事で、ほんとよかつた！」

麗華、神子を抱きしめる。神子、わん

わん泣いている。

○ 留置所・廊下

T 「数日後」

唯 N 「あのあと、丸井組はちやんと逮捕された。そして、私たちは先生に会いに来ている」

唯たち、廊下を歩いている。

○ 留置所・面会所

灰色の服を来た恭平、唯たち4人と面会中。

恭平 「そこにいるのか？」

唯 「はい。4人います」

神子 「ごめんなさい、先生」

恭平 「もういい。謝らなくて。それより、盗聴器使つてたみたいだが、佐々木大丈夫か？」

？」

麗華 「大丈夫じゃないですね……私が可能な限りかぶつたんで先輩は無事なんですが、

私はもう二度と刑事にはなれないでしよう。

でも、目的は果たしました」

恭平「よかつたな」

○学校・中庭

麗華「で、百合花。成仏してないけど」

3人、百合花を見つめる。

百合花「うん。うちの未練ね、犯人見つけることじやないの」

麗華「はああああ！？」

百合花「気にせず見つけてって言つたでしょ」

神子「じや、じやあ。なんで」

百合花「唯」

唯「なに」

唯、座る。げつそりとしている。

百合花「私ね⋮⋮」

百合花、もじもじしている。

唯「え⋮⋮」

唯と百合花、頬を赤くする。

麗華「まじ？」

神子「え、ええええ」

麗華と神子、驚く。

麗華「だから、ずっと唯についてたんだ」

百合花「言えなかつたことが未練だから、言えないと」

唯「そ、そうだつたんだ……う、嬉しいなあ……私も、ずっと、好きだつたから、百合花に、振り向いて、もらうために、がんば、た」

唯、胸を掴みながら仰向けに倒れる

百合花「唯？」

唯「ごめ……ん、ね」

百合花「嘘だ……」

神子「え、なんで」

麗華「明らかに過労だよ、これ」

百合花「そんな」

唯「つ、疲れた……百合花に、振り向いても  
らいたかつた……でも、未練がそつだから、  
ずっと振り向いてもらえなかつたんだ……」

百合花「やだ、やだ、やだよ。うちのせいで

こんな！」

百合花、麗華、神子、ぽろぽろと涙を  
流す。

唯「ううん。いいの。私は、私のやりたいよ  
うに生きた。未練はないよ。だから……  
謝らないで」

百合花「嫌だ！ 未練がないなんて言わない  
で！」

神子「まだまだいっぱい遊ぼうよ」

唯「もう……遊んだよ。みんな、いっぱい、  
私にくれたから」

唯、百合花に手を伸ばす。

唯「百合花……だい、すき……」

唯の伸ばした腕が、力なく地面に落ち  
る。

百合花「唯？ 唯？」

麗華「嘘、だ」

神子「信じない信じない」

3人、笑顔のまま動かなくなつた唯を  
見つめ、

3人 「あああああああ！」

声をあげて泣く。

○墓地

T 「1年後」

唯の墓の前。3人が手をあわせている。

麗華 「まさか、百合花がまだ見えるなんて」

百合花 「唯がいなくなつたから、次の場所を  
⋮⋮いや、きっと唯がのこしてくれたんだ  
よ。みんなに仲良くしてほしいって」

神子 「そう、だね」

麗華 「さてと。いつもの居酒屋でも行こつか  
⋮⋮4人で」

3人、涙を含んだ顔でにこつと笑う。